

2026（令和8）年7月1日

「日本語学会 2026 年度春季大会報告」

発表者：笠原隆成（東京外国語大学大学院博士前期課程）

日本語学会 2026 年度春季大会の中から 2 件の発表を紹介し、所感を述べた。

1 件目は、「北陸諸方言における主語・目的語の格標示——動作主性・有生性・主題性の関与する示唆的項標示——」（松倉昂平氏・米村雪乃氏）である。所感として、以下の 2 点を述べた。

- ① 主格標識が、河原山・安島では名詞句階層の上位から分布しており、脱主題化仮説（下地 2019）に適うように見える一方で、七尾・金沢では名詞句階層の下位から分布しており、典型的に期待される文法関係からの逸脱と関連しているように見え、同じ北陸地方の中でも示唆的主語標示の動機が異なっている。形態的主語標示が名詞句階層の下位から分布するのは、日琉諸語の中では珍しい。
- ② 北陸地方の言語島とされる安島において主格・対格標示がほぼ義務的であることは注目に値する。主格・対格標示は山陽でもほぼ義務的であり（小西 2015 など）、主格標示に関しては九州でもほぼ義務的である（下地 2022）ことが知られる。上方語における主格・対格標示の変遷については、坂井（2020）が、中古には有標対格的な傾向を持っていたが、やがて主格・対格標示が徹底されるようになったあと、19 世紀には有標主格的な傾向を持つようになったと論じており、地理的に離れた安島と山陽における徹底した主格・対格標示は、主格・対格標示が徹底されるようになった段階を留めていると解釈することができる。各地の主格・対格標示の詳細な記述が必要である。

2 件目は、「文政期備中の膝栗毛の方言資料的価値と「疑問詞＋仮定形」型疑問文の成立」（三宅俊浩氏）である。所感として、以下の 2 点を述べた。

- ① 当該発表では、中国地方において、バ行ウ音便の分布が近代以降に急速に縮小していたことが確認された。佐藤（1986）や小林・熊谷（2023）は、少なくとも 1960 年代以前は共通語形も「空から降る伝播」ではなく「地を這う伝播」であったとし、共通語形の伝播速度は方言語形よりも早かったと推定しているが、中国地方におけるバ行撥音便の拡大もまさにこれに当てはまると考えられる。
- ② 中世京都の形式とされた「疑問詞＋仮定形」型疑問文が、白峰・南近畿・中四国から大きく離れた東北日本海側に分布する経緯が説明されていないように思われた。中世より後に北陸から日本海に沿って拡散したと考えられる形式が多数あることをふまえると、仮定形疑問文も同様の拡散を経験したと考えられる。現代の北陸地方では白峰を除いて仮定形疑問文が見られないことについては、新潟・富山・石川は準体助詞がよく用いられる一方で、白峰は例外的に準体助詞が用いられないことをふまえると、白峰以外では準体助詞疑問文が発達したことで仮定形疑問文が衰退した可能性が考えられる。なお、笠原がフィールドとする新潟県中越地方には「何話そうば。」のような反語の構文があるが、この「ば」が条件助詞の「ば」と関連するかは不明である。

【参考文献】小西いずみ（2015）「広島市方言の対格標示」『国語教育研究』56: 13-24./ 小林隆・熊谷康雄（2023）「共通語化と方言地理学」小林隆・大西拓一郎・篠崎晃一（編）『方言地理学の視界』東京: 勉誠社./ 坂井美日（2020）「近世近代における上方語の格標示について～有標主格言語成立の一例～」シンポジウム「係り結びと格の通方言的・通時的研究」2020年9月20日, オンライン./ 佐藤亮一（1986）「地域社会の共通語化」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一（編）『講座方言学3 方言研究の問題』145-178. 東京: 国書刊行会./ 下地理則（2019）「現代日本共通語（口語）における主語の格標示と分裂自動詞性」竹内史郎・下地理則（編）『日本語の格標示と分裂自動詞性』1-36. 東京: くろしお出版./ 下地理則（2022）「日琉諸語の格体系 概観と類型化」木部暢子・竹内史郎・下地理則（編）『日本語の格表現』205-237. 東京: くろしお出版.